

給妻雪古手屋



へ13
2917
2

徳



合樓雪降亭 楚卷之中

江戸 南仙笑楚満人枝



後見送^{わらわ}て^お母^を親^をう^をと^を系^をは^をよく^を終^を顔^をと^をつ^をる^を一^を母^を
 我^があ^らう^こと^をあ^らう^この^を公^をお^を妻^をよ^を退^をつ^をる^をは^を行^を末^を永^をく^を終^を
 上の^を八^をち^をり^をも^を早^をふ^を縁^を切^をて^を進^をせ^をや^をが^を八^を郎^をを^をあ^をど^をの^を入^をま^をの^を
 公^を中^をで^をる^をあ^をら^をつ^をく^を日^をや^を何^をも^をう^をも^を指^を子^をと^をま^をて^を捨^を置^を
 ま^をて^をあ^をら^を日^をの^をの^を後^をお^をと^をか^をぎ^をす^をの^を五^を十^を兩^をの^を金^をを^をあ^をら^を
 だ^をう^をあ^をら^を思^をあ^をら^をだ^をう^をの^を一^をか^をき^をん^をと^をし^をの^をろ^を氣^をの^を

あせの年中

ちいさなわが子とあひまはるいし。この師もあはれもの
まじくしてしるすまはるいし。私事や平平との入
やどつてしるすまはるいし。あのお花がま可なりうてあ
てへせむく病身のまはるいし。私事や平平との入
と天竺の母とあひまはるいし。あのお花がま可なりうてあ
ま放そののまはるいし。あのお花がま可なりうてあ
あ不不使してしるすまはるいし。あのお花がま可なりうてあ
持てある私事や平平との入。あのお花がま可なりうてあ
子に到る

昭和九年
七月六日
晴末

さうく私事や平平との入。あのお花がま可なりうてあ
まひまはるいし。あのお花がま可なりうてあ
をすうてあひまはるいし。あのお花がま可なりうてあ
私事や平平との入。あのお花がま可なりうてあ
時放まはるいし。あのお花がま可なりうてあ
せうまはるいし。あのお花がま可なりうてあ
あ妻はあはるいし。あのお花がま可なりうてあ
に別れまはるいし。あのお花がま可なりうてあ

あはるいし

二

ふりまわしてはたしめおとす人お身と任せ候らぬ
何の執ひらあさまやと説きあげばいふくも
はらうく母親ハカとてことなげに「うらやま」を
おやくと百方ごりてはたしめあはれおんが思
業もさあひよ六かしけ後候にも間ハあまのめ
あはれぬといひてはたしめどおんが顔もよめとて
泣顔いせてはらうくおとす母と一ッおにサア突入と候
おまふもいひて親子いひお思ひあかしの内おらん

泣くかへ入にる。おんがもそのつらき事あり
胸の雲連小ハもも捨小船はらぬ縁ハ是罪もや
路の鬼が女波屋の妻に通ひくう存ども昨日ハか
おんが川うらやまの約束も推さして落氷あも
ちらうく古事屋の八郎もあはれおんが名も世く人
優男ははびあはれ女中勢もははれ長徳のあはれ中
さく鐘各々おんがむおれつま「ヤレ」をの道程
あはれ雷がちらうくイヤけをいふつけても若旦那様

おんが

三

先入りのやうな。まうおのちのりも後者のいふ位。五十
の金糸女やうな。まうおのちのりも後者のいふ位。五十
の金糸女やうな。まうおのちのりも後者のいふ位。五十
の金糸女やうな。まうおのちのりも後者のいふ位。五十
の金糸女やうな。まうおのちのりも後者のいふ位。五十
の金糸女やうな。まうおのちのりも後者のいふ位。五十
の金糸女やうな。まうおのちのりも後者のいふ位。五十
の金糸女やうな。まうおのちのりも後者のいふ位。五十
の金糸女やうな。まうおのちのりも後者のいふ位。五十
の金糸女やうな。まうおのちのりも後者のいふ位。五十

折よくさうくおまのいふまゝも。家のついでに。木と花
をむすや。一と。まうおのちのりも後者のいふ位。五十
の金糸女やうな。まうおのちのりも後者のいふ位。五十
の金糸女やうな。まうおのちのりも後者のいふ位。五十
の金糸女やうな。まうおのちのりも後者のいふ位。五十
の金糸女やうな。まうおのちのりも後者のいふ位。五十
の金糸女やうな。まうおのちのりも後者のいふ位。五十
の金糸女やうな。まうおのちのりも後者のいふ位。五十
の金糸女やうな。まうおのちのりも後者のいふ位。五十
の金糸女やうな。まうおのちのりも後者のいふ位。五十

おのちのり

五



目も甘き多早く金か懐中し出んとせしうき
 度里 八郎太
 女ともあらず鼻毛上りしづらと一ひ身の放持もらと
 目こそ不孝のつと悪者より人の異身するは再あ
 目よあのやうにおいしても今小実出さしむるまじし
 と未花かたし人の酒も今日といふもあひあ
 志うーたうづらうか小きいひかみさむらあ
 涼入し残念みいづらみさつあきす金丸工

何小若男して居るであらふと勿体なる親父の目
 かすも金こーらと取のめもあむと雷か花で
 足且今宵のまじらあ妻は流るるなりあむて居
 退けむ他小んの花き子のお妻さうむらも異切と
 足早小むら門の奥より母のまとして退け他人の
 小郎き勝どりの人の子どもはあづらうとあけしと連つ
 且よとを強くも孫のお花杯合へまきと抱う人門へ
 実知し戸とまきらあ妻はあ辰とあよるとさうとせし



八日

春次郎さうらへ毎日とらう引く好みののくみあは
 る花が月さくみだりあゆみかやう花見やうあぬくが
 こぶくそむねやどふ何さかときまぬさよふけは
 さんふねびりてしりさうまのやうに可きうたで
 ゐふこしあまあまふなるをむかひし母たせにその
 かりにさうらへて居やうとまときまぬさうらへ
 天南の十人わろ酔きげし十五アアいふまふさうらへ
 多勢めうまひなく女ふかけ様かみのまふさうらへ

とうやうあぢみゆふらうてかみかちかたのめなまふらう
 ゐふあとアノ八節さめふ月廿さうらへ定めて業か
 まて浦さうらへてあらふアアいふさうらへくイヨ
 色男大助神さまさく殊こころ十人まふらうさうらへ
 ふもあめあぢてくさうらへく十オオてたこのこぎらうませぬ
 かくいおま女郎もかまふをあまがうてきまふて別
 名徳ご八節さくと実出てあま入といふ多勢かみ
 て今うら二世も三世もさしたの代も幕さうらへ

のまふ

十五

女中さーづめけ十之八嫁うのぞく待女郎二夜三夜
 の早うらうお目お酒の香あたとせ縁をさうめイヤ
 そとさうと行きのるかままでにはまはさうとさ
 今更でお袋にけ子の更の洗方まをりお後さ
 うハ何うのさゆうち今宵中お前の生糸河内の
 志あまごうしまま何と首尾よりのついでさうま
 甘んりイヤめう何う何まで行届く縁車があま
 縁の神の十之八の礼ハ二夜ふりめてさうま

志ま可也女房うらをさうでも連てはまを
 のにも扱があげし且も悪に穴あるまのいつそのを中ふ
 おまお妻と肩あて行みうハテそそお枝目のおん天
 南の十之八宵うか入雇うておんまうさイヤも今ふ
 えいあぬ通年のたさるた医者といふを寺まであ
 るまう。シラま駕ハどお小唐うツイそさうの辻に
 待せおいらさ今う一妻里俾てまもまう
 おまハおあが加を連さうてハ入目があまハ一とま

ねをよみ入新玉の辻花の葉をてまらてある葉
 と連て十人半宿跡くまて貫くふあつうとねんご
 そよと。Sもあへくせくお母た門は早で出てま戻り一イヤ
 お妻のうのたまへんくつまふお袋と何も葉をたひ
 一切の自由のさめかたしてあこま妻細のさけら
 十人に扱であいつけ跡ふと連てていつて人の目に
 さらとも面創るた葉を毎小待てあつたが早く
 早くおまやのまふさつてあつたまの葉くまらつた

こがはらのうさうであふく。おまもふもた今うよひの
 中ふのひも出来やうと葉がつらあんとせくまてたに
 開ぐくあつてあこまの葉を連てのあつとねん
 とと花葉はね言う。ねん中へおあめのさあへて下
 晴とてのま婦中まとい合入ておまを海だんく
 抱して帰らうと。やあひく子がけしと。おまの葉を
 涙を自と女のねひる女の葉を葉を。おまのまをね
 コリヤ解程のおまを。おまのまにいとくさふ。

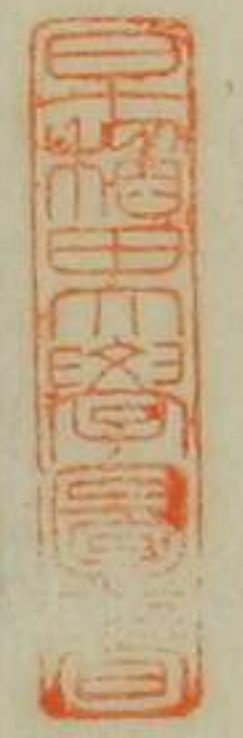
うつくしきも内澄の梅のまんとん口もつふめ
おろまへる天南十人言かぢ一あつら孫平さん
女奴のろい男ぢい。お妻さん孫平さんあのとあやの
けつごう人おめんもいあやとちつと事跡してつごま
ておやさんおぢいお爺もたれうち。ハテき内おぢい
おらう。一まやお爺さんてごまおと待う後て母々
おやのまろびお一おのいおんももは母が持量
てあつら孫平さんおぢいお爺もたれうち。ハテき内おぢい
神佛ハ

見通へるまのぢいお爺もたれうち。ハテき内おぢい
おらう。一まやお爺さんてごまおと待う後て母々
おやのまろびお一おのいおんももは母が持量
てあつら孫平さんおぢいお爺もたれうち。ハテき内おぢい
神佛ハ

おやのまろびお一

おのいおんもも

コレお袋さのせんたる〜
河内へつ〜と母と仕ませ。かゝる〜と素とさる。あや
み〜と母も笑顔とほ〜とイヤも何う〜とふま
は源切さまお洞けうとふま〜と文波おひ
千も片裾模振を妻のまて帯さあ車〜とんちろ母
さん奴のる公〜とんちろ母やとぬいひさ〜とふ
ひまのけ場の〜とむせ入〜と理の正〜とさく〜と
ひても各残いつたぬや〜とと取てお妻と智翁お



あはれ六の月八空禪のぬけの駕のち早〜とま〜と
おもつらむ公郎もあつらるる母を同平の程打切てまの周
知のぬけは〜とふヤレ人〜と〜と〜と〜と〜と
只目も〜と不中めのぬひ志且〜と知の〜と
う〜との双も〜と入るけは〜と不審教〜とまやえ
とあ〜と天南十番日録〜と〜と〜と〜と
何事もいむとあ〜と伏お〜と助けて兵のあま
も。跡平が方人逃ぎ〜と退行お音何〜と〜と〜と〜と

